



Be Creative !



102歳「自由っていいね」

6月6日は創立記念日。この日は、学園の創立者鈴木修学先生を偲び、学園の未来を考える日だ。

この創立記念日に先立ち、先日の朝日新聞に次のような記事が掲載された。今年、102歳の誕生日を迎える北野貞晴さんが、80年間過ごした群馬県にあるハンセン病の国立療養所を退所し、故郷の大阪に帰るという記事である。記事には次のようにある。「20歳で入所した北野さんは、身元を伏せるために名前を変えたこともある。反抗的な患者とみなされると監禁施設に入れられ、命を落とすも見てきた。怖くて、本音が言えなくなった。20代で結婚した。子どもは作れなかった。結婚する時は、断種と呼ばれる生殖機能をなくす手術を受けるのが決まりだったからだ。」

ハンセン病患者の強制隔離を定めた「らい予防法」は 1996 年に廃止され、患者は療養所を退所できるようになった。北野さんは当時72歳。「社会復帰」は考えなかったと言う。80歳から四国八十八か所のお遍路、90歳でハーモニカ、100歳で大正琴と新しいことに挑戦し続けたが、園内では同じ場所、同じ顔ぶれ、規則も多く、「牢獄と同じ」と北野さんは感じるようになる。101歳を目前にしたころ、「最後はふるさとに戻りたい。」、北野さんは退所の決意を固める。退所の前日は、気持ちが高ぶり、眠れなかった。「今日は、私の旅立ち。皆さん、お世話になりました。」出発の朝、施設の皆さんに万歳で見送ってもらったと言う。新聞には晴れやかに笑う北野さんの写真が掲載されている。

北野さんの幸せは、まずは北野さん自身が心身ともに健康であることに加え、支えてくれる人がいたことだ。親兄弟は他界しているが、親族が「帰ってきたらいい。」と言ってくれた。また、それだけではなく、大阪には退所者を支援する団体があった。この20年ほど、自治体の里帰り事業などで毎年大阪を訪れ、支援者や退所者と交流を深めてきた。旧知の支援者である加藤めぐみさん(71歳)に自分の思いを切り出した。加藤さんは、国から給与金が出るので経済的な心配はいらないと伝えるとともに、「寂しくはさせませんよ」と背中を押してくれた。この加藤さんの一言は力強い。北野さんは施設の職員も含め、多くの人に支えられて新生活をスタートさせた。「療養所にいる方が安全だ、楽だとわかっているけれど、自分の人生だから自分で決める。これから何年生きるかわからないけれど、エンジョイしないとね。」102歳のこの言葉は何とも頼もしい。しかしながら、それを支えた人たちの姿はそれ以上に頼もしい。

修学先生が育てたいと願った人たちを具現化した姿がここにある。昭和3年(1928年)、修学先生の取り組みはこのハンセン病患者を支えることから始まった。『日本の福祉を築いたお坊さん』の中には、この時の修学先生の苦闘が描かれている。修学先生は、力の限りやれることをやったが、結果は挫折に終わる。しかし、修学先生は転びながらも未来をつかみ、這い上がる人であったようだ。「窮すれば通ず」という言葉がありますが、真心をもって社会事業をすれば、助けてくれる人はたくさんいる。事業は為せば成るものだ。」自らの体験から得たこの教訓は、その後、修学先生が手がける様々な福祉事業の指針となり、その発展に大きな力を発揮することになる。修学先生の取り組みは、社会の中に存在する多くの「北野さん」の幸せを支えてきた。私たちもこの取り組みの一員にふさわしい力強い人間になりたい。

